第3章

回答者の基本属性

3-1　基本属性

3-2　平成10年8月末集中豪雨災害における被害

3-3　水害の発生可能性に関する住民意識

本調査の対象者は、平成10年8月末集中豪雨災害において郡山市内の阿武隈川流域に発令された避難勧告・指示の対象地域周辺に居住する住民747世帯である。ここでは、調査対象者の基本属性と今回の水害における被害の状況を取りまとめ、加えて、今回の水害が発生する以前に抱いていた住民の水害発生の可能性に関する意識の実態を把握する。

調査項目は、以下のとおりになっている。調査項目の詳細は付録を参照されたい。

問１	被害の有無	問24	住居形式
問２	被害内容	問25	職業
問３	今回の水害発生の予想	問26	未就学児人数
問12	(1)世帯人数	問27	高齢者人数
問20	生年	問28	61.8.5水害における被害の有無
問22	居住地		

３－１　基本属性

【生年】（問20）

「昭和21～30年生まれ」が25.6%と最も多く、次いで「昭和11～20年代生まれ」22.8%、「昭和元年～10年生まれ」20.0%となっている。

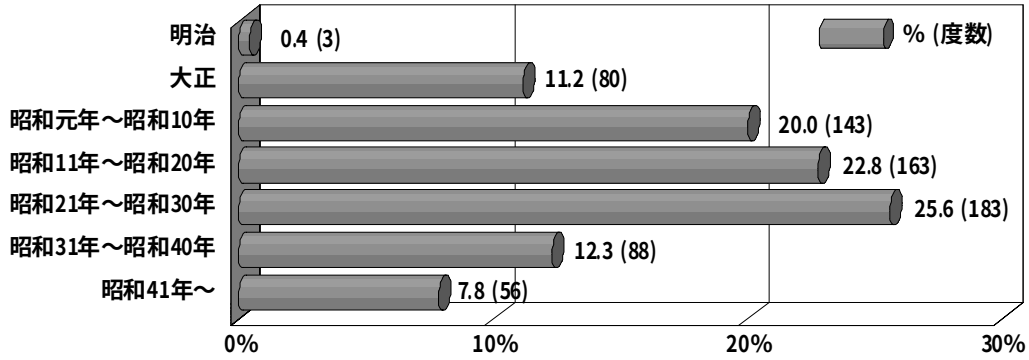

図３－１　回答者の生年

【居住開始年】（問22）

生年構成とは異なり、居住開始年の構成は「平成３年以降から」が23.3%と最も多く、次いで「昭和51年～60年から」が20.8%、「昭和41年～50年から」が19.1%となっている。

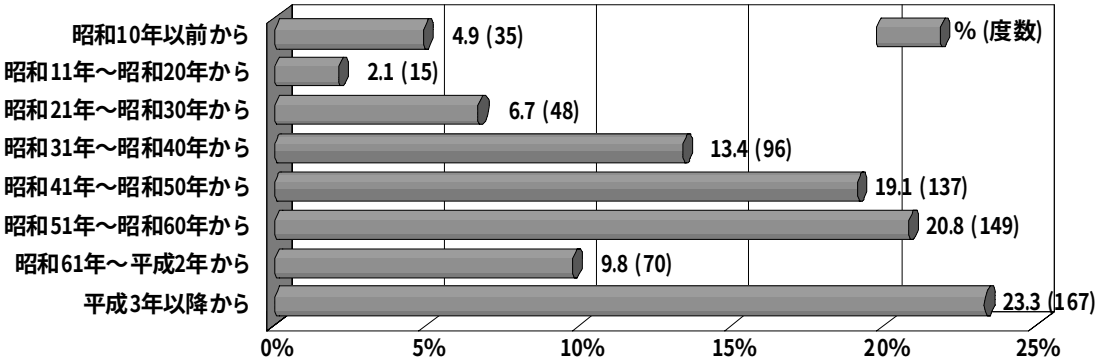

図３－２　回答者の居住開始年

【住居形式】（問24）

調査票は、なるべくアパートやマンションを避けて配布したため、「アパート・マンション」の構成比は5.1%と少ない。75.7%は「２階以上の戸建て」となっている。

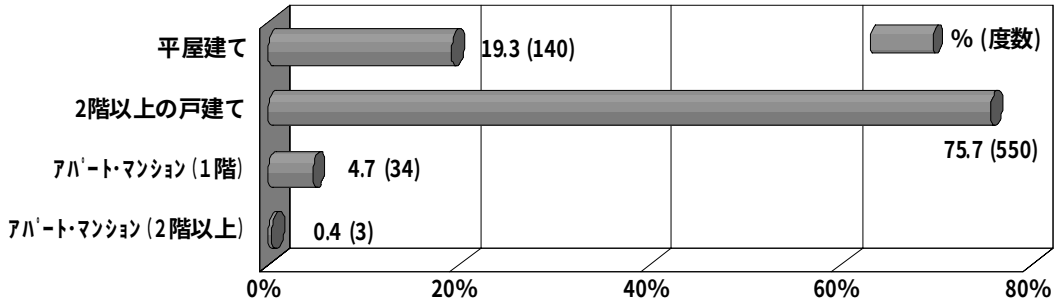

図３－３　住居形式

【職業】（問25）

回答者の職業構成は、「会社勤務（公務員含む）」のが最も多く54.5%、次いで「無職」22.9%、「自営業」14.8%となっている。

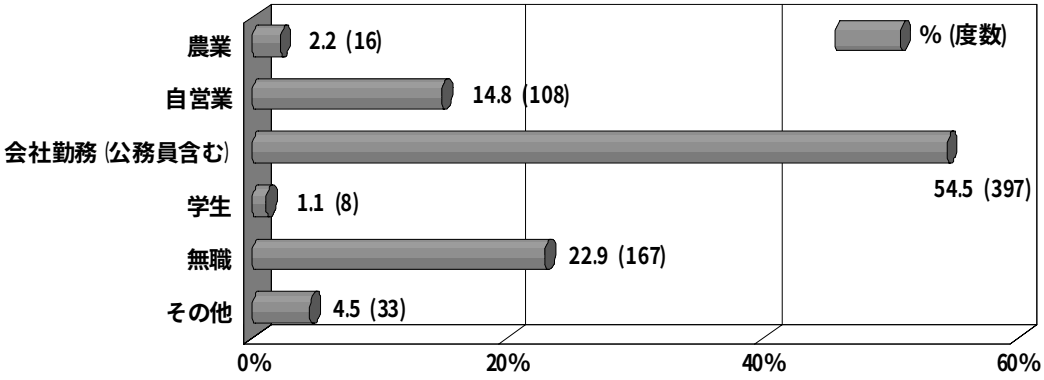

図３－４　回答者の職業

【回答者世帯の未就学児人数】（問26）

回答世帯の家族の内、小学生未満の未就学児人数は、「０人」が最も多く79.2%、「１人」は12.4%、「２人」は6.9%、「３人以上」は1.5%となっている。

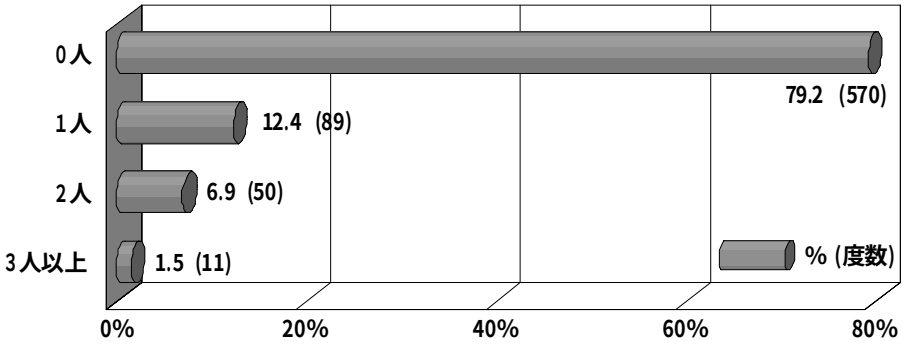

図３－５　回答者世帯の未就学児人数

【回答者世帯の高齢者人数】（問27）

回答世帯の家族の内、65歳以上の高齢者人数は、「０人」が最も多く59.1%、「１人」は21.5%、「２人」は18.0%、「３人以上」は1.4%となっている。

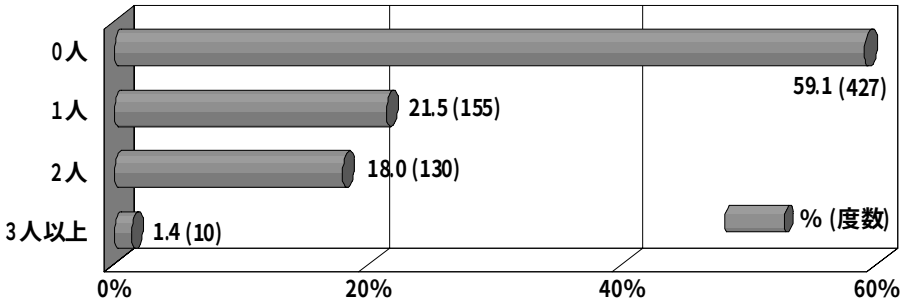

図３－６　回答者世帯の高齢者人数

【回答者世帯における高齢者の有無】（問27、問12(1)）

ここでは、回答世帯の世帯人数と65歳以上の高齢者人数の回答に基づき、高齢者人数が０人の場合は「高齢者なし世帯」、世帯人数よりも高齢者人数が少ない場合は「高齢者あり世帯」、世帯人数と高齢者人数が一致している場合は「高齢者のみ世帯」として集計した。これによると、「高齢者なし世帯」が全体の60.0%を占めており最も多く、「高齢者あり世帯」は217世帯で30.5%、「高齢者のみ世帯」は68世帯で9.6%を占めている。

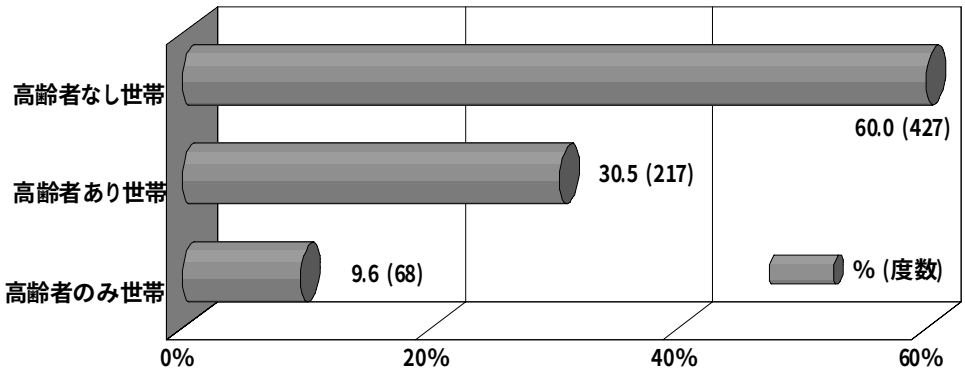

図３－７　回答者世帯における高齢者の有無

【61.8.5集中豪雨水害における被害の有無】（問28）

61.8.5集中豪雨水害において被害を被った経験のある世帯は、147世帯で全体の20.6%を占めている。

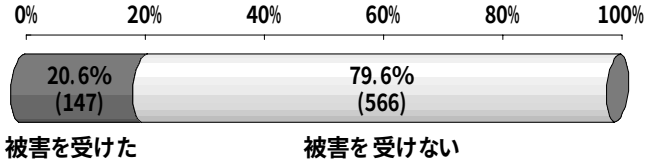

図３－８　61.8.5集中豪雨水害における被害の有無

３－２　平成10年8月末集中豪雨災害における被害

本調査の回答者747世帯のうち、今回の水害によって何らかの被害があった世帯は115世帯で、全体の15.4%を占めている。

浸水被害の程度別にみてみると、「床下浸水（大人のヒザ程度）」が最も多く50.4%を占めており、「床上浸水（大人の腰程度）」は23.5%、「床上浸水（一階の軒下程度）」は4.3%となっている。それ以上の「床上浸水（二階の軒下程度）」「床上浸水（二階の軒下以上浸水した）」のような甚大な浸水被害は、調査対象地域では今回の水害によって発生していない。

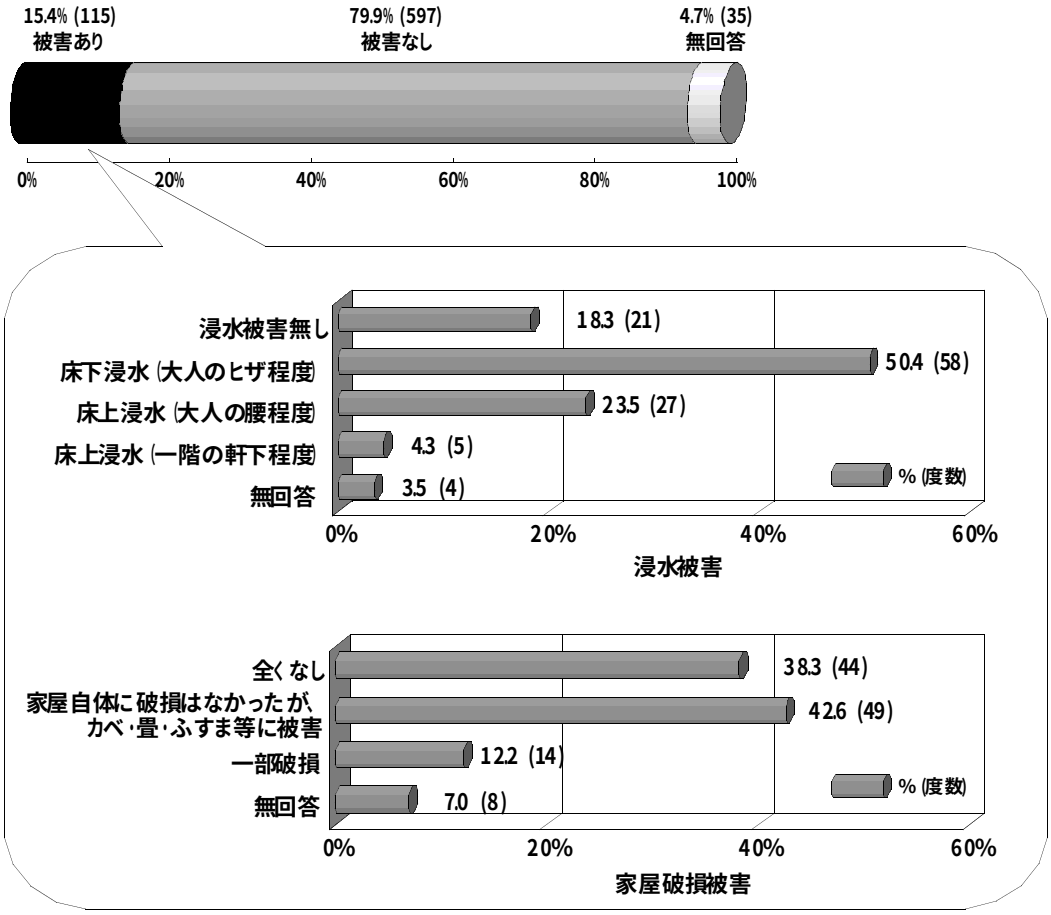

図３－９　今回の水害における回答者世帯の被害の有無

家財等の被害内容についてみてみると、インテリア・家具類に関しては、「じゅうたん」「整理ダンス」「本棚」などの被害が多くなっている。寝具・衣類に関しては、「靴」が28件で最も多く、「衣類」は16件となっている。台所用家電類に関しては、「ボイラー」の被害が最も多く31件、次いで「洗濯機」が13件となっている。音響機器・楽器類に関する被害は、比較的少ない。冷暖房機器類の被害は、「エアコン室外機」の被害が27件で最も多い。その他の被害としては、「食料品」「書籍」の被害が多く発生している。

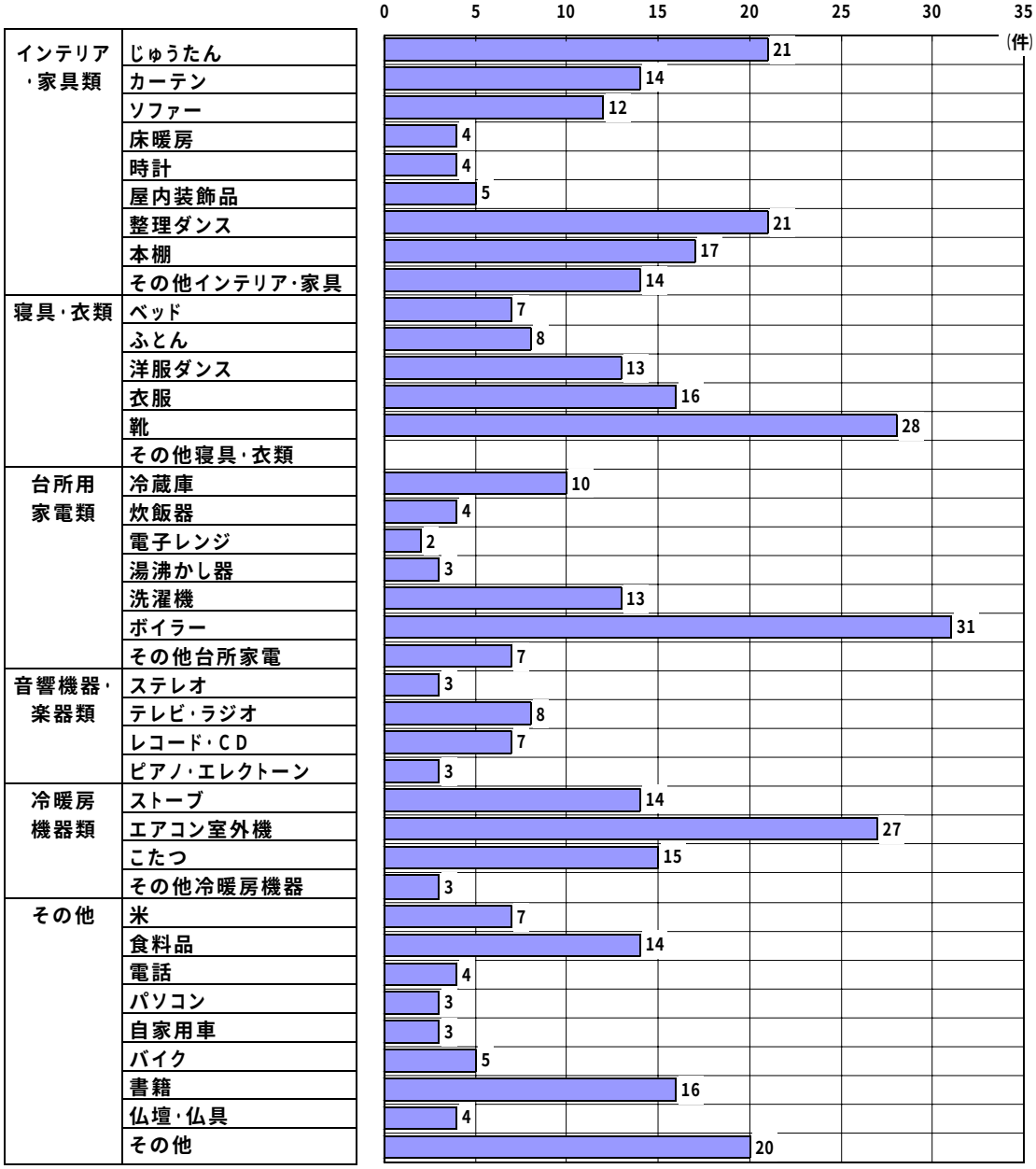

図３－10　今回の水害における回答者世帯の被害の内容

３－３　水害の発生可能性に関する住民意識

point
- **今回の水害の発生を予想すらしていなかったという、水害に対して楽観的な認識を持つ住民が存在する。一方で、近々もしくは将来における水害の発生は、多くの住民が予想していた。**
- **若年層において、洪水の発生可能性に関する意識の低さが目立つ。**
- **61.8.5水害で被害を受けた住民は、洪水の発生可能性に関する意識は高い。しかし、そこでの軽微な被害や被害を免れた履歴、その後堤防の改修工事、などは、洪水の発生可能性に関する住民意識の低下を助長する。**

・ここでは、洪水の発生可能性に関する住民の意識について把握する。

・「このような洪水は近々発生すると思っていた」「このような洪水は将来いずれ発生すると思っていた」と回答する住民が全体の61.1%を占めており、多くの住民が水害の発生可能性を意識していたことがわかる。しかし、7.0%の住民は、郡山市における洪水も発生を「予想すらしていなかった」と回答しており、洪水に対して楽観的な認識をもつ住民の存在が確認できる。

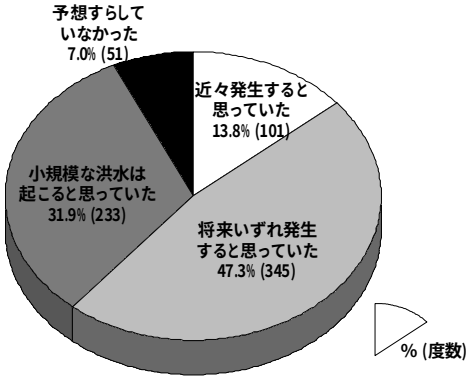

図３－11　洪水の発生可能性に関する住民意識

【生年との関係】

・昭和元年～昭和20年生まれの住民において洪水の発生可能性に関する意識が高く、年齢が若くなるほど洪水の発生可能性に関する意識が低くなっており、昭和41年以降に生まれた住民においては「近々発生すると思っていた」とする回答は、わずか3.6%にとどまっている。

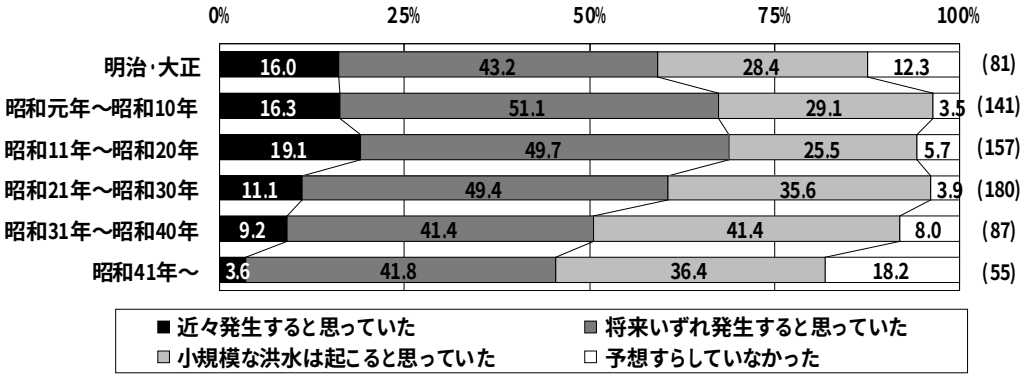

図３－12　洪水の発生可能性に関する意識と生年との関係

【61.8.5集中豪雨水害における被害経験との関係】

・61.8.5水害で被害を受けた経験のある住民においては「このような洪水は近々発生すると思っていた」「このような洪水は将来いずれ発生すると思っていた」とする回答の割合が約77%を占めているのに対し、61.8.5水害の被害経験のない住民では約57%にとどまっており、洪水の発生可能性に関する住民の意識には、過去の洪水における被害の経験が大きな影響を及ぼしている様子がわかる。

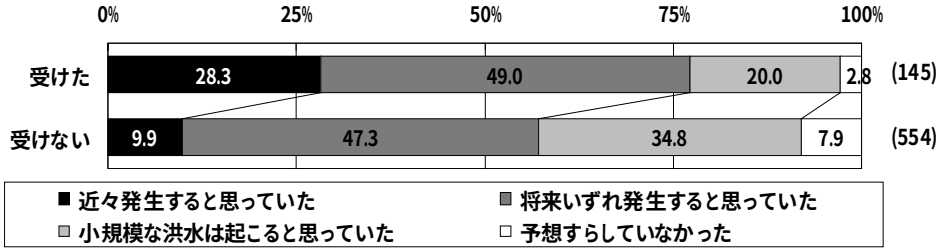

図３－13　洪水の発生可能性に関する意識と61.8.5水害における被害経験の有無との関係

【居住地域との関係】

・次に、回答者の居住地域別に、洪水の発生可能性に関する意識を見てみる。
・図３－14によると、Ｄブロックにおいて「このような洪水は近々発生すると思っていた」と回答する住民が24.5%を占めており、「このような洪水は将来いずれ発生すると思っていた」とする回答をあわせると、約80%近くの住民が洪水の発生可能性を強く認識していたことがわかる。Ｄブロックは、61.8.5水害において甚大な被害を受けている地域であり、Ｄブロックの住民におけるこのような洪水に対する意識の高さには、過去の甚大な浸水被害経験が大きな要因として影響を及ぼしているものと考えられる。
・一方、Ｂブロックでは、Ｄブロックと同様に61.8.5水害では甚大な被害を受けた地域であるにも関わらず、Ｄブロックほど洪水発生に対する意識は高くなっていない。むしろ、61.8.5水害でＢブロックよりも浸水被害が軽微だった地域や浸水被害を免れている地域が多くを占めるＡ・Ｃ・Ｅ・Ｆブロックと同じ程度、もしくはそれよりも低い意識となっている。この背景としては、Ｂブロックの一部地域には新築の分譲住宅が多く、61.8.5水害を経験していない新住民が多くを占めていること、また、古くからの居住者においては、61.8.5水害以後に堤防の漏水対策などの補強工事が行われたことにより「もうこれで大丈夫だろう」といった安心感のようなものが芽生えつつあったこと、などの要因により、洪水の発生可能性に関する意識が低くなっているものと考えられる。

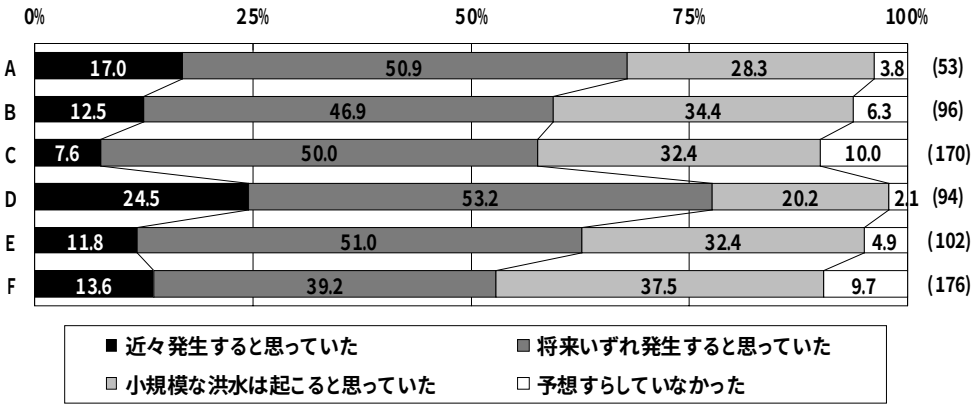

図３－14　洪水の発生可能性に関する意識と居住地域との関係

「洪水の発生可能性に関する意識」の問題点・課題

・洪水の発生に関して現実的な認識を持つ住民が多くを占める一方で、今回の洪水の発生を予想すらしていなかったというような洪水に対して楽観的な認識を持つ住民の存在が確認された。災害時における住民の行動を規定する要因は、唯一、住民の災害意識にほかならないことを踏まえると、近年の防災行政において重視されつつあるソフト面での防災対策は、ここで見たような洪水に対する住民意識の高揚に重点を置くべきであろう。